グリフィスの越前紀行

【グリフィスが福井在住時に Aotabi（越前国今立郡粟田部）へ旅した時［1871 年 6 月 24 日（明治四年五月七日）］のことを後年回顧して発表した文章 “A Jaunt in Echizen” をご紹介します。Bayard Taylor 編 *Japan in Our Day*（1892）より。記念館職員訳】

日本での経験について書いている多くの旅行者の中でも、本州を大きく二つの山すそに分割し、それにより気候も二つに分けている大山脈を越えた人は、少ない方だ。我が国の「東部」、「中部」、「西部」諸州というグループ単位にあたるものとして、巡幸区というべきグループがあるのだが、南西部の諸州は二グループに分けられ、それぞれが「山の陰」および「山の日向側」という意味の名を持つ。日本全体を九つに分けるこのグループ単位の各名称はすべて、「海」か「山」の街道・地域という意味である。

越前州は「北の陸路」区にある。本州西海岸には大きな湾および湊は少ないが、その中でベストといえるのは、この州の敦賀である。古来、多くのコリアンをはじめとするアジア大陸からの移民の上陸地としてあった。東イングランドの古き「サクソン・ショア」に例えられるかもしれない。今は京都からの鉄道の終着点である。この敦賀からおよそ 20 マイルの所にある都市が、福井である。その名は「幸福の井戸」「祝福の井戸」という意味で、何世紀にもわたって越前の大名の拠点であり、その城と武士団の所在地だった。自由思想を志向し、西洋文明による日本刷新の最も早い先駆者のひとりだったのが、越前候マツダイラである。

1862 年、大君の首相として彼は、大名を強制的に江戸に居住させる慣習を廃止した。1868 年の戦争が終わってすぐ、彼が自分の領国でアメリカ的主義に基づく公教育を組織するために招いたのが、“The Mikado’s Empire” の著者となる人物だった（訳注：グリフィス本人のこと）。この本では歴史というかたちで、また封建制度下の大名の城下での生活を描いた “Honda the Samurai” ではフィクションの体裁で、私は 1871 年 10 月 1 日の越前侯の退位を描写した。この時以後、自らの殿様に家臣として直接仕えてきた者たちはすべて無条件に、ミカドの家来となった。忠誠心が愛国心となり、彼らにとっての国はもはや越前ではなく、ニッポンとなったのである。

福井にいた間、そのアメリカ人教師は金札という帝国通貨に使う紙を作る工場に招かれて行ったことがある。日本人は昔から紙幣作りに熟達していて、1872 年までに諸大名が発行した約束手形がいろいろとある。形も大きさも値打ちも模様も様々で、みな丈夫だが、たいてい領国の外では通用しない。そのため、旅行者は煩わしい程ひんぱんに両替せねばならなかった。ずっと前から全ての回収・焼却を進めてきた帝国政府は代わりに、円くて、縁がぎざぎざで、美しく圧印されたコインを大阪で造幣し発行した。金貨、銀貨、銅貨、ニッケルの他にも、アメリカ式に組織された国立銀行の発行券と、政

府発行の小紙幣があり、日本の神話由来の象徴や歴史的肖像で装飾されたそれらは人々に、安価な取引の媒体として供給されている。1867 年には流通する紙幣の種類が 23、金属貨幣の型は 49 もあったが、今は単一の標準通貨のみである。

福井から 10 マイルの Aotabi（緑のかくれ里）に住む製紙業者から、「陋屋」（自分の家をこう表現せねばならないのが日本の作法である）にお越し下さいとの招待を受けた。

日本の六月は、稲が芽吹き、蚕が糸で復活のローブを織る季節である。1871 年のその月、めったにない好天の下、馬に乗った三人の一団---アメリカ人、その通訳、護衛の騎士---が、福井城市の門から出撃し、その村へ向かった。いまだ「青い目の外国人」によって騒ぎを起こされたことのない村へ。福井の町は広い平野にある。山並みに囲まれた平野は幅 2〜8 マイルで、町から 20 マイル続いている。この地はスリリングな歴史の舞台としてだけでなく、名産品によっても知られている。お茶、絹、そして紙である。山の斜面は釉薬をかけたような色の深い常緑の茶樹が芳しく茂っているが、開花期には青白い花々によってかすんで見える。竹藪と杉の木立の陰には、農夫、忙しい紙漉き人、養蚕家たちの住む多くの村々が隠れている。この州はお米でも名声を得ているが、越前和紙は帝国全土の書き手たち、書記官から文人たちまでが求めてやまないものである。

アオタビという村の名前は、古事に詳しい現地の人によれば、6 世紀初めにここに住んでいたアオタビ皇子に因むものらしい。西暦 507 年から 531 年まで統治した 28 代目のミカド継体天皇は、まだ王位を継ぐ前の時代、この小さな村を居所としていた。今から遠くさかのぼった 8 世紀の話としてすでに、コリアの使節がここを訪れ、村で作られた美しい紙を賞賛したという。

平野を行く我々一行は特段の事件もないまま、ある橋までやって来た。街道上の小川にかかるその橋の脇は、処刑場だった。日光を照り返す赤い血溜まりが染み込んだ穴。釘を打たれ、固定用金具が付いた一本のポールが道路沿いに立つ。その三本の釘を頭蓋骨に打ち込まれて、顔が正面を向くように固定されていたのは、贋造者の首だった。彼は厚みのある紙幣を薄く半面づつに裂いて、偽の半面を本物の半面の裏に貼り付けた。その詐謀と技術で 50%を利得とする手口は利口だったが、捜査の手は二、三週間で彼に届いたらしい。冷厳な事実はポールに取り付けられた掲示板に簡潔に説明してあり、私の通訳が読んでくれた。我々は旅を続けた。

目的地に着いたのは午後四時。我々の来訪は午前中先乗りさせていた料理人によって告げられていたため、初めてやって来る外国人の訪問客を見ようと村全体が待ち構えていた。慣習により、村役人は村の入口の外に出て我々を迎えてくれた。膝を折り、地面に手をついて、歓迎の辞を述べる。我々が村の通りへ馬を進めると、人、人、人。蚕の世話も、繭の糸引きも、綿打ちも、紙漉きも、仕事をみんな放り出して来た人たちが、彼らの客人を少しでもよく見ようとして、立ったり膝をついたりしながら、目を丸くし

て見つめていた。ひとりのアメリカ人の前で、何百人という人たちが膝をついている。こんな経験をした人はほとんどいないだろう。村々の女性と子供たちは、お祈りをするように手を組んで膝をついていた。それほど、彼らの殿様に仕える役人に払われる敬意は大きかった。

村の通りには立てかけられた板がずらりと、何百枚も並んでいた。漉いたばかりの紙を載せて干しているのだ。畳の上には糸引きを待つ蚕の繭が山と詰まれていた。我々のホストとなる商人の家の前にはとりわけ人々が密集していた。彼らに囲まれて、我々は馬を下りた。好奇心をもてあまし気味の数人が、外国人の目と髪の色が気になったらしく近づいてきた。彼らはやりとりされる外国語の意味も知ろうとした。私は世話になる主人に手を差し出したが、彼はそれを見て、私の通訳の方を向いた。いったいこの動作は何を意味しているのか、どうか教えてほしいという眼差しだった。握手は知られていなかった。礼儀正しすぎる主人はどうやら、彼の客人が何かを借りたがっていて、それは現金なのか、爪楊枝か、ハンカチか、とでも思ったようだが、理解した後で自分の手を私の手の中に差し入れてくれたのだった。こうして外国人の手の中に、無抵抗な手が力なくおさまった。彼の意思とは無関係に、彼の指が揺さぶられ、丁重に、傷つけられることなく返された。なんとまた愉快なジョーク、そう受け取ったのであろう彼がぷっと吹き出した。緊張の氷が融け、社交性の洪水となってあふれた。五分のうちに馬たちは厩舎に入れられ、豆の飼葉にありつく前に藁束でごしごし洗われた。その間、馬の主人たちは奥の風通しのいい広間に通された。そこから見える庭園には、小さな楓、松、紫陽花、躑躅、大きな白百合、そして山に見立てた高みから落ちる滝があった。小さな轟きとともに流れ、銀色の小石を飛び越えて池の中へ。金色の魚がきらめき、亀が元気に動く。庭園は洞窟やミニチュアの崖をかたちづくる岩によって荒野の景を添えられ、頭上には、村を草茂る懐に抱く“Sun-field”（日野）山がそびえていた。

あいさつと祝辞は、私の西洋的感覚では家の中に入る前にもう十分にすんでいたのだが、それは儀式本番のほんの前置きに過ぎなかったとわかった。我々の休憩所となる美しい部屋に通された途端、おそるべき礼儀作法を目の当たりにすることになった。主人とミヨシ（彼はサムライだ）は向かい合うと、まるで互いに合図でも送りあったかのように突然手と膝を落とした。一瞬のうちに、畳にまで下ろされたテカテカの頭皮しか見えなくなった。どすん！ふたつの頭が床に着く。ひょいと上げて、また床へ、上げて、また下へ、さげて、上げて下げて、都合四回。一通りミヨシの番が済んだら、岩淵（私の通訳）に交代。彼はシーザーのように羽織をひるがえし、男らしく試練を潜りぬけた。

この時私は、どうして日本人は額に髪が無いのか、よく分かった。この日一番大変な仕事を終えて、やっと彼らは腰を下ろした。袴を広げ、扇子を取り出してぱたぱたする。

儀式が終わり、煙管が取り出され、煙草が詰められる。かわいい十三歳ぐらいの少女が現れた。夏用の繊維の華やかな衣装は Dolly Varden（訳注：当時の英米の婦人服の流

行）柄。腰に深紅の絹の帯を巻き、青いクレープ生地のパッドやリングで髪を飾っている。蒔絵を施した煙草盆をちょこちょこ運んできて、膝まづき、掌を伏せた手の上に額をつけてお辞儀すると、ぴょこんと立って行って、また戻って来た。今度持って来たのはちっちゃな湯飲みと、小振りな台。台上の真っ白な紙の上には飴が載っていた。

主人は太っていて、明かるく、よくしゃべった。先祖代々この村に住み、同じ家業を六百年続けてきたという。今住んでいる家には築三百年の建物もある。巨大な樹が家に陰をつくっているが、その木は彼の先祖がこの地に来た時には既に育ちきっていたそうだ。屋敷の中には家族の礼拝所もあり、先祖の遺骨や形見が守られている。見せてもらえませんか？頼んだら見せてもらえた。ベランダのような廊下を渡り、その部屋に入った。部屋は幅 10 フィート、奥行 30 フィート。一番奥に豪華な祭壇と、阿弥陀の画像。仏教のパンテオンの首座にある仏だ。黒漆の地に金文字で書かれているのは、主人の先祖の名前。そのかすれや黒い染みが語る、数世紀の歳月！主祭壇の下方に、もうひとつ仏画がある。蓮の花に座る、涅槃の姿だ。日々の礼拝に使われる鈴と、本と、ろうそくが、その前に置かれている。磁器の鉢の中の灰に立てられた木片の束が、炎は出さずに静かに燃えている。「偶像に立てる棒」。それが信者でない者による非礼な呼び名だが、偉大なブッダの前にお香のかすかな煙が漂っている。右隣の戸棚から主人が次々に取り出したのは、皇帝、武士、将軍、京都の貴族たちの筆跡や、日本の賢者たちの自筆の詩文が残された帳面。刀剣、香箱、帯、硯箱、等々。ミカドより賜った、将軍から拝領したと、惜しみなく展示されていく。石油王たちが見せてくれる物よりもずっと古い歴史を持つであろう、この家族の遺品に囲まれる楽しい時間を過ごした後、我々は主人の経営する製紙場へと向かった。

その家の、庭を挟んだ反対側の広い場所に、十数人の少年少女がしゃがみ、楮の木の大枝小枝が山と積まれていた。この大量の和紙を生み出す元となる木が、村の山々の中腹までを覆っている。楮は高さ 6〜8 フィートまで育つ。その枝を切ってきて、一度乾かしてから水に浸けておくと、外側の緑色の樹皮を内側の白い薄膜から剝ぎ取れるようになる。並んでいる小屋の中で樹皮を剝がしたり、せせらぎの上に屈んで仕事をしているのは、大人も子供もみな女性たちだ。取って、洗って、その繰り返し。数十人で、もろくなった暗色の樹皮を、しなやかな白い薄膜から剥いでいる。大変な時間と根気を要する仕事を経て、取り出された白いしなやかな繊維の束を、稲藁の灰でつくった灰汁の中でさらに軟らかくなるまで煮込む。茹でて軟らかくなった樹皮は、次の部屋へ。ふんどし一丁のたくましい二人が、大きな平たい石の前に座っている。彼らに重い木の棒で叩かれた樹皮は、パルプとよべるような状態になる。別の部屋では男性が米を挽き、女性が何かの木の皮、楡のつるつるの内樹皮に似たそれを煮出したものと、一緒に混ぜている。つやが出て、グルテン状になった混合物が、糊として使われるのは明きらかだ。この糊と、叩き手から届いた塊が、パルプ桶に放り込まれる。桶の大きさは、長さ 4、

幅 3、高さ 2 フィート。

それぞれの桶のところに少女がひとりづつ座って（かかとや足首の上に乗る、日本の最も一般的な座り方）、一本の竹の棒を使ってパルプをせっせとかき混ぜて撹拌する。ちょうどいい固まり具合になったと判断したところで、彼女は竹の繊維を平行にきめ細かく編んだ簀を持ち出す。簀は軽い木でできた四角い枠（桁）にはさまれている。印刷機の“fly”のような感じだ。竹ひごが密に編まれているのは、我々ならば金網を使うような用途による。この道具を桶の中にすべり込ませるように浸け、パルプを薄く紙一枚分引き上げ、水は排出する。排水している間に、素早い手つきで不純物や小さな塊を摘み取る。終わったら、簀の縁が少し高くなるように付けられた部材を持って、紙を取り出す。彼女の横に広げた紙が積み重ねられる。器用な少女が一日に漉き上げる数は 450 枚。その次の工程が、乾燥だ。平たい丈夫な板の上に広げて、日に向けて立てかけておくと、少し縮んで、丈夫で真っ平らな紙になる。湿った天候の時、仕事の立て込んだ時などは、板を部屋の中に運び込んで炭火を絶やさないようにする。普通のウェッジやレバーを使ったプレス機にかけ、最後にはつや出しをして仕上げているのを見て、我が国の皮なめしが磨いたりアイロンをかけたりして仕上げるのと、本当に同じだと思った。

この全工程にかかる時間を考えると、アメリカの経営者にはとても耐えられない。それに我が国のような賃金の高い国では、まず採算が取れない。Wissahickon 川や Cohoes、Bath で使われる機械についての私の説明を喜んで聞く主人の顔には、疑いの影が差していた。私は雇人に支払っている日当の額を尋ねた。樹皮の叩き手、紙の漉き手に一日 8 tempos【原文に（cents）と注記。おそらく天保銭】、皮を剥いで洗う人には 6 セント。この事業を始めた時から合計 40 人を雇用して経営しているが、賃金を払い、燃料費、運送費、税金など差し引いて残るのが年間 1000 ドル---結構な金額だ。彼は裕福な商人だと考えられる。様々な色、品質、大きさ、厚さの紙をつくる設備を持っている。特製品のひとつに手紙用の紙がある。日本ではたいてい幅 6 インチの紙で、長さがおよそ 18 インチになる。数枚を貼ってつないで、巻けるようにして使われるのだ。

日本語で「長い手紙」というのは、6 フィート以上のことだ。女性用や手紙用は、香りをつけたり、金縁だったり、赤い罫線が入っていたりする。贈り物の包装用紙に色鮮やかに描かれ、あるいは型押しされているデザインは、富士山、果物籠、海の貝、文学的題材など多種多様だ。ある種の紙のあまりの軽さは、蜘蛛の糸を漂白して織ったのかと思う程だった。日本では稲藁を使う製紙業が、相当な産業になっている。ここで挙げた以上に様々な種類の木が、紙の原料として使われる。全般的に言って、和紙のなめらかさは精妙で、光沢は絹の様で、日本とチャイナにおける書法、すなわち刷毛をペンとして使い、いわゆる「インディアン・インク」を顔料とする用法に、まさにかなっている。多種類ある紙はどれも丈夫で、中にはどうやっても裂けないようなものまである。なめらかさと丈夫さにおいて、和紙の品質は特別である。

製紙場から、自分たちの部屋へと戻ってから、日本の財政・政治に関して、夕飯までいろいろ語り合った。その後、ふとんに入った。縦 6×横 4 フィートのキルトを敷いて、それをふたつ重ねるとベッドになる。寝台、シーツ、羽毛の枕、リネンの寝具一切が、純和風のベッドには無い。寝間着と布団は最高の絹だったけれど。格子縞の絹が使われるのはほぼ寝具に限られるので、日本人がアメリカで以前流行した婦人服の流行の模様としてそれを見たら、奇異に感じるような連想をすることになる。つづいてモスキート・ネットの取り付けである。部屋全体をおおうほどの大きさで、正しくは「モスキート・ハウス」と呼ぶ。どうしてこんな小さな害虫がモスキートなどと長ったらしい名前をもらっているのか、日本人には理解の外である。彼らは ka と呼ぶ。緑の網の下に横になった我々に、主人が“yasumi nasari”（ご休息を）と告げて立ち去った。さらさらと小さな水の流れる音が聞こえた。その子守歌にさそわれて、我々はすぐ眠りに落ちた。夢の中に、遠く離れた故郷の牧草地の小川と、なつかしい顔が浮かんだ。

【補】

※1 マイルは約 1.6ｋｍ、　１フィートは約 30.5ｃｍ、　１インチは約 2.54ｃｍ

「越前侯マツダイラ」「1862 年、大君の首相」　グリフィスを福井藩に招いた松平春嶽。文久二年に幕府の政事総裁職に就任し、参覲の緩和など急進的改革を行った春嶽を、グリフィスはとても尊敬していました。1871 年の廃藩の時は、後継の茂昭が当主でした。

「贋造者の首だった」　グリフィスが府中在住の金札贋造犯の獄門刑を前日のこととして日記につけているのは 11 月 22 日です。旅中にさらし首を見たという記述は、この事件と、滞日中にさらし首を実見した経験とを生かした創作でしょう。

「アオタビという村の名前は」　ここでグリフィスが語っているのは、〔粟田部←ヲホド部＝男大迹王（継体天皇）に従う民〕という地名由来伝承です。この年の二十四年前（1847）に、橘曙覧たちにより足羽神社に継体天皇の世系碑が建てられていました。

「糊として使われるのは明きらかだ」　実際には“ねり”が繊維を包むことで絡み合わなくなり、漉き舟の中で均等に分散させられるために入れるのだそうです。

グリフィスが旅した越前和紙の里へ、ぜひ足をお運び下さい！
https://www.echizenwashi.jp